



# 長崎ソカイネットワーク

私たちは、長崎に疎開してくる方々を「長崎に住む私たちにできること」を通じて市民で支え、心細くなりがちな疎開生活の立ち上げを応援します。また、「長崎に疎開に来てみてよかった」と思ってもらえる方々を一人でも増やし、将来にわたって長崎と東北各県の絆を深められればと考えています。

## 設立当時の「趣旨」

東日本大震災の被災地では復旧に向けた懸命の努力が続けられておりますが、復旧には時間がかかることもあり、地域外へ「疎開」する動きも始まっております。

長崎県や長崎市も公営住宅の提供などを表明しており、早晚長崎市内でも現実に受け入れが始まると見込まれます。

しかし、長崎に縁者がおられない方だと、到着しても「どのバスに乗ればいいのか」からはじまり不案内なことが多い上、生活必需品も十分でないまま新生活のスタートを切ることになる恐れがあります。

また、高齢者や子どもを抱え、避難所生活を長期間続けることは難しいと思いながらも、疎開先でどういう暮らしが待っているだろうかと心細い思いを感じ、踏み出せないご家族もおられるのではないのでしょうか。

私たちは、行政が空き住宅を提供するだけでなく、市民が中心となって「長崎ではみんなが力を合わせて温かく迎え入れる」というメッセージを出し、このことで「長崎に行けば落ち着いて将来のことを考えられるかも知れない」と被災地の方々の心に少しでも灯りがともればと考えます。また、実際に長崎に来て「良かった」と思ってもらえる方々を一人でも増やし、将来にわたって長崎と東北各県の絆を深められればと考えます。

## 団体の構成

- (1) 設立発起人は、共同世話人の川良真理・橋本剛の幼稚園保護者関係者や高校同期が核になり、長崎市内の若手経済人・文化人を中心に構成。(詳細はウェブ参照)
- (2) メンバー(ボランティアスタッフ)は登録約200名、実際の活動参加者は100名前後。長崎に来られた方々(ソカイ家族)が約20組30名ほど。

## 活動状況

- (1) 当初は「街案内」をイメージするも、ソカイ家族は生活物資がない状況で到着するケースが多く、物資支援に切り替え(2011年3月~9月頃)
- (2) 早期から、ソカイ家族への新聞発行を企画し、2011年5月から月刊『ほくほく新報』(A4裏表)を発行。関係情報の量の関係で2012年12月からA4片面で発行。
- (3) 2011年後半から、長崎生活に溶け込めるよう、「ファミリー交流会」を企画。震災支援チャリティライブを開催している「ミュージックワークス長崎」と連携。
- (4) 2012年はじめまで長崎市が所有する倉庫に支援物資を置き、実質的な交流スペースとして活用。その後は市民活動センターに不定期に「ふらっとスペース」を開設。
- (5) 受け入れ活動を行っている東彼杵町や新上五島町の団体と連絡を取り合うほか、前述の「ミュージックワークス長崎」や、震災を忘れない活動を行っている「チーム長崎」、「Rainbow of Hope」、「九州東北直結プロジェクト」などと連携。



2011年3月25日長崎市で記者に設立の説明会。ボランティアスタッフや物資提供を募るためにもメディアとの関係は大事にしました。



長崎ソカイネットワークの物資を置いた倉庫。実質的な交流スペースの役割を果たしていましたが、恒常的な管理人員をボランティアスタッフでまわすのは難しい面もありました。



活動は「町内に来た方を応援する拡大町内会」という発想の下、ケースバイケースで実施。これは半年使っていなかった住居へ入居するソカイ家族の入居前に掃除をしたケース。メディアの取材で認知を高める役割を果たしました。



予想外に物資支援のニーズが高かったので、「街案内」より物資収集と提供に比重を転換し、2011年夏までこの状態が続きました。市民から提供の申し出があった家電等を引き取りに行き、倉庫に集めてソカイ家族に自由に選んでももらいました。



大型家電などは、長崎軽運送協業組合や電気販売会社などのご支援をいただき、運んでももらいました。搬送の人員はボランティアスタッフ。

ソカイしてきた若い男性も手伝ってくれました。



長崎は階段や狭い路地が多く、搬送は人海戦術です。



活動の核の一つが月刊『ほくほく新報』の発行です。A3見開きでソカイ家族へ配布（郵送ほか）。現在ではA4片面です。以前はウェブサイトにも載せていましたが、ソカイ家族が登場することが多くなり、プライバシーへの配慮から配布のみに切り替えています。（NHK-BSや総合で特番）



ソカイ家族も「支援されるだけでない」形を望み、芋煮会を開催しました。ソカイ家族数組で芋煮を準備し、みんなで作りました。参加者が多く、芋煮だけでは足りないので、BBQも一緒です。ボランティアスタッフの皆さんでつくっています。



行政の倉庫や会議スペースを使い、提供物資も市民からの無償提供だったので、大きな額は必要ありませんでしたが、通信費等々の費用がかかります。この費用は、基本はバザーで捻出していました。震災支援バザー@眼鏡橋など各種の機会を捉えて取り組みました。



逆に、募金はほとんどやりませんでした。一度だけ、「目的別募金」をやってみました。九州の夏を過ごせるよう、扇風機や冷房の設置費用を募ったり、地デジ転換支援、『河北新報』購読費など募金する人に「今の課題」を伝え、共感してもらう取り組みです。メディアは注目してくれました。



関心を集めるとともに、運営資金を確保するため、夏の風物詩「長崎夜市」に喜多方ラーメンの出店を出しました。また、岩手県出身者が「若女将」をつとめる岩手地酒試飲コーナーでは気分良かったお父さん方がお札で寄付をくださり、かなりの金額を「いわて子どもの学びの基金」に送りました。また、宮城県産品販売の活動をしている『心風』さんをお願いして宮城県のコーナーも作り、東北三県のストリートをつくりました。



ソカイ家族との「ファミリー交流会」は、震災支援チャリティライブを開催し続けている「ミュージックワークス長崎」と共催しています。長崎の人気バンド「Jellyfish」も駆けつけ、飛び入りのチビッコとともにソカイ家族にひとときのくつろぎを感じていただけたと思います。



田んぼで遊ぶ企画を「ながさきしネイチャーゲームの会」のご協力で実施。ソカイ家族の子どもたちも楽しそうでした。



震災を受けた東北とハイチの子どもたちの絵の展覧会です。こういった企画があると、長崎ソカイネットワークが一種の「ハブ」的な役割を果たして、様々な団体とつなげたりしています。



最近では、東北から来られた若い方々が核となって「九州東北直結プロジェクト」が力強く活動しています。長崎でのソカイ家族は、時間の経過とともに少しずつ数が減り、あるいは長崎で暮らす普通の市民になりつつあります。『ほくほく新報』はしばらく続ける予定ですが、「拡大町内会」としての役割は収束に向かっているという自己認識です。おそらく、今後はこういった「地域間交流」のような取り組みを側面支援する立ち位置に落ち着くように感じています。

長崎ソカイネットワーク

〒850-0022 長崎市馬町21-1 長崎市市民活動センター「ランタナ」内

電話 090-3200-6318 (共同世話人携帯) メール [nagasaki.sokai@gmail.com](mailto:nagasaki.sokai@gmail.com)

ウェブサイト <http://nagasakiokai.web.fc2.com/>

Twitter @nagasakiokai Facebook <http://www.facebook.com/nagasakiokai/>